



写真でたどる日本赤十字看護学会 20年！

- 2000年 ● 5月27日 日本赤十字看護大学において、学会発会式
第1回学術集会(メインテーマ: 21世紀の赤十字の看護)
発起人代表: 樋口康子(日本赤十字看護大学長: 当時)。会員登録1215名。

「週刊医学界新聞」
第2393号(2000年6月26日)より

- 2001年 ● 日本赤十字看護学会誌第1巻1号発行



学会ニュースレター創刊

- 2003年 ● 学会ホームページの開設

- 2008年 ● 災害活動委員会発足
第1回災害看護セミナー開催



基調講演



- 2009年 ● 10周年記念行事の開催

東日本大震災の時の
石巻赤十字看護専門学校

- 2011年 ● 東日本大震災発災。
支援活動ならびに被災者支援のための研修会の開催。



- 2014年 ● 第1回赤十字・赤新月
国際看護学会開催



- 2016年 ● 熊本地震支援活動



熊本地震支援活動

- 2018年 ● 第19回学術集会西日本豪雨のため中止。

- 2019年 ● 第20回学術集会
(日本赤十字看護大学)

赤十字の看護の
歴史を伝える資料展示

第20回学術集会を終えて

日本赤十字看護大学
名誉教授 川嶋みどり



改元による新たな時代が始まったばかりの令和元年6月15・16日の両日、東京の日本赤十字看護大学で第20回学術集会が開催されました。雨模様にも関わらず出足好調、看護師OBらの女声合唱団コールシャマイクルの「お早う看護師」の澄み切った歌声に涙、涙のオープニング。

大会テーマは「赤十字看護の伝統を革新する独創力と実践力」。改めて諸先輩らの優れた看護実践を想起し、その底に流れる看護の心とわざの継承発展が、現代の人々の多彩なニーズに応える道であることを共有、自由な発想のもとで未来を切り拓く気概と実践力を求めようとプログラムが練られたのでした。

尽きることのないケアを地下水にたとえた徳永進医師のお話を受けて、詩人の谷川俊太郎さんの詩の朗読を挟んだお二人の縦横な言葉のやりとりは会場を魅了。2日目のカールベッカー先生は、スピリチュアルに生きる意味を最後まで追求し

尊厳ある生を支援することの意味を、全身を言葉にして舞台を縦横に駆け巡りながらの印象的なお話でした。

ごく当たり前のことを続けることこそ伝統を革新するとのシンポジウムは、本大会の主旨を反映するものであったと言えます。このほか、テーマセッションや教育講演それぞれ中身の濃い内容でしたし、12もあった交流セッションは何れも魅力的なテーマで、選択に迷う声もあったようです。ただ、例年に比して一般演題の応募数が伸びなかったのは何故か、今後の課題も残しました。

学術集会に参加して

日本赤十字豊田看護大学
巻野雄介

私にとって日本赤十字看護学会学術集会への参加はこの第20回が初めてとなります。川嶋みどり先生の力強い会長講演から始まり、とても活気があり刺激的でした。

今回は卒業生と一緒に卒業研究を発表させて頂きました。友好的な雰囲気でしたが、初めての学会発表で「先生どうしよう」を繰り返し、当人はとても緊張しておりました。研究成果を得るまでに、その卒業生がハンドマッサージを合計360分行うなど大変なこともありましたが、そういった経験もあってか、発表する姿に凛々しさや頼もしさを感じました。その姿はとても新鮮で、私自身も自分の研究と向き合い、成果を積み上げていかなければならないと、初心に戻ることができ、忘れられない時間を過ごすことができました。



日本赤十字看護学会に はじめて参加して

日本赤十字北海道看護大学
渡辺温子

今回はじめて日本赤十字看護学会に参加し、研究発表もはじめてさせていただきました。会場に向かう際は、はじめてづくしで緊張していましたが、会場内のあたたかい雰囲気を感じ、少し緊張がほぐれました。

大学・就職ともに日赤でしたので、なんとなく親近感やアットホーム感を感じたのかもしれません。

研究発表では、いろいろな視点からの研究があり、自分自身の視野も少し広がったように思います。また、これまで読んだ本の著者である著名な先生方の講演を聴講させていただき、大変貴重な経験をさせていただきました。また、参加させていただきたいと思います。



「研究奨励賞」を受賞して

第20回日本赤十字看護学会学術集会において、とても光栄な賞をいただき本当に嬉しく存じます。私は、1人ひとりの患者の「Comfort(安楽)」を大切にすることというのを17年間の臨床看護実践において行って参りました。一重に「Comfort(安楽)」と言いましても個性があり多様性があり、しかしながら確かに看護実践の中で私自身が患者との関わりの中で「産まれている」と感じていたことでした。それを、研究として可視化していくという作業はかなりの時間を要しましたが、とても刺激的でもありました。最後に、研究のご指導を頂きました先生方、研究に参加して下さった方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

岩手県立大学 谷地和加子



この度、投稿論文「看護師の患者・家族の怒りへの対応の特徴」に対して、研究奨励賞を頂きました。私自身が看護師長として患者・家族の対応に悩む中で、他の看護師の良い実践からヒントを得られるのではないかと思います取り組みました。調査では、協力者の方と事例について省察するなかで、その方の看護観と経験知に触れる貴重な体験となりました。これからも看護師の経験知を形式知にできるような研究を続けたいと思います。研究に協力くださいました看護師の皆様、選出していただきました皆様に感謝申し上げます。

京都第二赤十字病院 中川典子



第21回 日本赤十字看護学会学術集会 (21st Conference of the Japanese Red Cross Society of Nursing)

テーマ「不確かな時の“生きる”を支える看護」

開催日：2020年7月4日(土)・5日(日)

第21回日本赤十字看護学会学術集会 開催に向けて

学術集会長 安藤広子

第21回学術集会は「不確かな時の“生きる”を支える看護」をテーマに、7月4日(土)・5日(日)の2日間、日本赤十字秋田看護大学にて開催をいたします。

赤十字の看護は、赤十字の理念の基に災害時の救護をはじめ医療、介護、福祉など広く活動を行っています。しかし、今日の社会環境は、自然災害が多発し、少子高齢による独居の高齢者や慢性疾患を抱えた人達が増えています。また、科学や医療技術の著しい発展による検査や治療の選択の幅が広がっており、人々の葛藤や苦悩も生じています。更に、情報技術(IT)の発達により、多くの情報が飛び交い、人々の価値観も多様化しています。このように変化が大きく不確かな状況における人々の“生きる”を支える看護について考えたいと思います。

また、2020年は、フローレンス・ナイチンゲールの生誕200年にあたることからも、看護の基本である『(不確かな時の)生活過程を整える』ということにも注目していきたいと思います。

本学術集会では、全国の看護の実践者並びに研究者、看護教育者、学生また一般市民の方々も参加できるような運営を考えております。教育講演を2題(「生活をささえる看護についてー地域で活動する看護師の語りからー」村上靖彦氏、「医療に関わる人びとはどう生きるべきなのか?ー終末期医療にたずさわり仏教哲学を学ぶ産婦人科医師の立場からー」吉崎陽氏)、パネルディスカッション「東日本大震災の復興を支える看護」「超高齢化フロンティア赤十字病院の将来展望」の他、研究や実践報告、交流集会、市民公開講座や特別企画展「秋田赤十字124年の歴史を振り返るー同方會の歩みー」等を企画しております。

学術集会運営委員一同、多くの皆様のご参加をお待ち申し上げます。

フローレンス・ナイチンゲール 記章を受章して

一般財団法人日本赤十字社看護師同方会
理事長 竹下（浦田）喜久子



本年、私は第47回フローレンス・ナイチンゲール記章を受章させて頂きました。受章のお知らせを、日本赤十字社より、F・ナイチンゲールの誕生日である5月12日に受けました。6月15・16日に開催されました日本赤十字看護学会にて、お祝いのお場を設けていただきまして誠にありがとうございました。8月7日、東京プリンスホテルにて開催されました記章の授与式で、日本赤十字社名誉総裁皇后陛下よりお手ずから章記を賜り、記章を胸につけて頂きまして誠に感激致しました。

今回の私の受章理由は、主に日本赤十字社で行いました災害救護活動でした。2011年の東日本大震災では、長期間、避難所や在宅で避難生活を余儀なくされた方々に対し、看護ケアを提供する「看護ケア班」を派遣しました。これまで、日本赤十字社は急性期の災害救護を中心に実施してきましたので、初めての班編成と派遣となりました。また、福島第一原子力発電所の二次被災者に対して、日本赤十字看護大学と協働して、避難しておられる方々を長期にわたって支援致しました。大規模な災害が頻発する今日、健康や生活が長期にわたって脅かされる状況があり、生活を支える災害看護活動が重要と考えています。

2004年に発生したスマトラ島沖地震・津波災害では、大きな被害を受けたインドネシア共和国アチェ州の看護学校4校に日本赤十字九州国際看護大学と共に「災害看護教育学」の導入を図りました。災害時には、まず自国の力で救護活動が出来ることが重要と考え、「災害看護学」のカリキュラムを設定し、現地の先生方に教授法の技術移転を行い、学生に教授して頂きました。すでに卒業生は、災害時に災害救護活動を行っています。

これらの活動は、共に働いたスタッフや大学との協働で実施した事業です。この受章を皆さんと共に喜びたいと思います。ありがとうございました。今後とも精進していきたいと思います。

はまってけらいん かだってけらいん ー陸前高田市での活動8年目ー

日本赤十字北海道看護大学
山本美紀

東日本大震災から8年が経過しました。日本赤十字北海道看護大学では発災後から現在まで年2～3回、岩手県陸前高田市にて赤十字の救急法や幼児安全法、健康教室を開催してきました。最初の数年は仮設住宅の集会所がほとんどでしたが、最近は災害公営住宅の集会所で行うことが多くなりました。この8月は、新たに建てられた地域の自治会館で活動してきました。復興が進んでいるとはいえ、未だ仮設住宅で暮らしている方もいます。人口減少が続く中、高齢化と一人暮らしの高齢者が増加しています。北海道から来てくれるからと、普段、地域の行事に参加しない方が参加してくれることがあります。「はまってけらいん かだってけらいん」は、仲間に入って話しましょうという意味の方言です。私たちの活動が少しでもコミュニティを維持する場づくりになればと思い、「また来てね」という言葉に励まされながらこれからも活動を続けていきます。



2020年度日本赤十字看護学会 研究助成の募集

- 臨床で研究したいけど、資金のない方、修士課程、博士課程の院生で研究を計画の方！
- 2年間、1年間の助成期間、金額を自分で決めて応募できます！
- 他の助成金を受けていても応募可能です！
- 日赤看護学会会員はどなたも応募できます！
- 助成金は、物品費・旅費・謝金・通信費・運搬費・印刷費等に使用できます！

応募受付期間：2019年10月1日(火)～2020年1月31日(金)【消印有効】

助成を受けた方は、その研究成果を本学会学術集會に発表し、その後、本学会誌に投稿してください。詳細、応募時の記入様式は、本学会ホームページをご参照ください。

<http://plaza.umin.ac.jp/jrcsns/committee/kenkyu/josei/>

研究活動委員会



NEWS LETTER The Japanese Red Cross Society of Nursing Science Vol.17, 2019.
日本赤十字看護学会ニュースレター 第17号 2019年11月発行

- 発行 日本赤十字看護学会 広報委員会
東京都渋谷区広尾4-1-3 日本赤十字看護大学内
- 学会ニュースレターは学会ホームページからダウンロードできます。
<https://plaza.umin.ac.jp/jrcsns/publication/>
- 学会ニュースレターに関する皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。
nisikata@rchokkaido-cn.ac.jp
namimo@rctoyota.ac.jp までお願いします。

● 編集後記

ニュースレター vol.17では、発足20年目を迎えた本学会の活動の足跡を、ほんの一部ではありますが写真で振り返り、節目となった第20回学術集會の様子を2ページにわたって紹介しました。また、今号から、紙媒体ではなくデータによる発行になりました。ホームページからは、すべてのバックナンバーのPDFデータがダウンロードできます。ぜひ多くの方に活用していただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。